



企画屋本舗

企画屋のこれから

年度末「もっと多くの方に活動を知ってもらうには?」「参加者に企画を出してもらおう?」「わかりやすい活動を」と今後の検討をしました。

「環境びっくり箱」は、親子で参加する企画を継続。「子どもの知識や世界、体験をもっとひろげたい」「親子の会話の種にできないか」「わかりやすい活動を」と意見続出。今までにない発見と笑顔を期待して。

「写真で元気」“世界でひとつの私だけの作品を撮った写真でオリジナル・クラフト作り”を目的にします。デジカメ持って街



へ。変わった店。古い家。空を切りとり、木洩れ陽もつかまえる。

様々な色や柄の台紙に、写真を3枚。飾りは押し花? リボン? 迷う時間も楽しい。同じ街角なのに、捕えたのは一人ずつ違うワンダーランドトヨナカ。さあ、心も体もリフレッシュ!

「おはなし会わにわに」子どもが沢山きて欲しい。環境や自然の絵本を紹介したい、と続けてきましたが、お気に入りの本を紹介してもらおう等、もう少し参加型にと考えています。まずは

簡単なアンケートから。参加者同士の交流も出来ればと楽しみです。(井下祥子)



環境交流センター

「びったんこ隊」をふりかえって 2014~2016年度

「びったんこ隊」は、半年ごとに参加者を募集する連続講座。テーマは、自然、食べ物、水、森林など、それぞれがつながっていて、回を重ねる毎に理解が深まるプログラムでした。子どもを直接サポートするのは大学生のリーダー達。各テーマを学び、子ども達に「伝える力」や「共に育てる力」「見守り育てる力」を発揮できるよう、我々スタッフは複層的なサポートを行いました。例えば、琵琶湖に行ってシジミ取りをした後に、漁師さんに植林の話を聞き、次の回に、暮らしと「水」や「生きもの」との関係性を考えました。

子どもと大学生と一緒に体験を通じて学び合い、そこから更に理解を深めるためのプログラムを大学生自身が考え、子ども達の前で実践してみようという事を繰り返して行いました。その結果、子どもや大学生達は、「いい」「悪い」という単純な答えではなく、自分達はどうかしたらいいかを考える力がつき

ました。ある日、紙を無駄遣いしていた友だちに向けて、他の子が「そんなことをしたら森の木が可哀想だ」という発言をしていました。繋がりの中で自然の大切さを実感し、自分がどうすべきかを考えた上での発言だったと思います。

また大学生は、子ども達1人1人の成長を「場面」



ではなく、「時間」で捉え、自分がその場でどんな対応をしたら良いか、迷いながら学んでいきました。個々の多様性が尊重される中で、子ども達は家庭でもその学びを実践し、保護者へ友人へと輪を広げてくれました。

我々にとっては、試行錯誤の3年間でしたが、学校教育では経験できないESD(持続可能な開発のための教育)を実践する貴重な機会となりました。また、そこに関わってくれた子どもや大学生にとっても、今後につながる学びや思考の土台ができたことに大きな期待が持てます。

(上村有里)